

令和5年度「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」 結果について

令和5年11月10日
学 校 教 育 課

平均点のみに依らない、個々の学力の伸びや非認知能力の変容を確かめられる新たな調査を導入

- 1 調査名称 京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～
- 2 調査目的 児童生徒の伸びや変容から、指導のポイント・課題を把握し、より効果的な指導を実現
- 3 調査対象 府内公立小・中・義務教育学校及び特別支援学校の小学校第4学年～中学校第3学年
(京都市除く)

【令和5年度受検者数（人）】

	小学校 第4学年	小学校 第5学年	小学校 第6学年	中学校 第1学年	中学校 第2学年	中学校 第3学年
国語	9,117	9,129	9,352	9,088	8,953	8,907
算数・数学	9,108	9,130	9,358	9,086	8,955	8,925
英語					8,948	8,915
実施校数	200	200	200	100	100	100

- 4 実施時期 令和5年5月15日（月）～19日（金） 中学校
5月22日（月）～26日（金） 小学校
- 5 調査内容 教科に関する調査 小学校第4学年～第6学年：国語、算数
中学校第1学年：国語、数学（算数）
中学校第2、第3学年：国語、数学、英語
質問調査 生活状況、非認知能力、学習への取り組み方等、ICT利活用に関連する調査
- 6 調査の特徴＜IRT×CBT方式＞ 全府実施では全国初
 - (1) 教科に関する調査及び項目反応理論【IRT（Item Response Theory）】を用いた学力の推定
・異なる調査でも、調査結果を直接比較することができるIRTを用いることで、学力の伸びを確かめることが可能となる。
*上記のためには、「過去問題」の利用が必要であるため、出題問題は非公表
 - (2) 非認知能力や学習への取り組み方等を確かめられる質問調査
・京都府教育振興プランに示す3つの「はぐくみたい力」、学習への取り組み方等について、複数の質問項目を組み合わせることで測定
(*「主体的に学び考える力」、「多様な人とつながる力」、「新たな価値を生み出す力」)
 - (3) 調査方法 1人1台端末で出題及び解（回）答【CBT（Computer Based Testing）】
- 7 返却する個人結果票：別紙①参照

1 新たな調査を導入した経緯

(1) 従来の学力診断テストからの変更

京都府教育委員会では、平成3年度から令和3年度まで、小学校第4学年及び中学校第1学年において「京都府小学校学力診断テスト」を実施するとともに、平成15年度から令和3年度まで、中学校第2学年において「京都府中学校学力診断テスト」を実施してきた。

令和5年度からは、「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」と銘打って新たな学力調査を実施することに変更した。

＊：平成24年度までは、中学校第1学年ではなく、小学校第6学年で実施

(2) 調査方法の変更理由

現在の学習指導要領（平成29～31年改訂）の公示以降の社会や学校教育の変化を踏まえ、文部科学省が示した「令和の日本型学校教育」^{※1}の考え方の中では、全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実が求められている。京都府においても、個々の児童生徒の実態を適切に捉え、その可能性を伸ばしていくことができるような環境を整えていくことが重要である。

一方で、従来の府内における児童生徒の学力・学習状況の把握・分析方法を振り返ると、平均値を手掛かりにして、自校の平均値と府の平均値との比較や学校間・市町間での比較等、個々の児童生徒よりも学校・市町といった集団を視点にして把握・分析を行うことが多くあった。場合によっては、平均値にのみ着目し、過度な順位競争につながるようなことがあったことも否めない。また、学力調査の結果は、ある時点における学力の特定の一部を調査したものであるため、学校教育においてはぐくみたい力^{※2}が把握しづらい面や、個々の児童生徒の学力が経年でどのように変化したのかを把握しづらい面がある。

このようなことを踏まえて、京都府教育委員会では、一人一人の認知能力を伸ばし、非認知能力の変容を測るための「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」を設計し、令和5年度から本格実施することとした。

※1：『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）（令和3年1月26日中央教育審議会）、「教育課程部会における審議のまとめ」（令和3年1月25日中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会）

※2：京都府教育振興プランに示す「3つのはぐくみたい力」：「主体的に学び考える力」、「多様な人となつながら力」、「新たな価値を生み出す力」

(3) 公表内容について

「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」の最大の特徴である「個々の伸び」に注目できる形で公表することとした。

他方、全国学力・学習状況調査については、「各地域等における教育水準の達成状況をきめ細かく適切に把握すること」、「すべての教育委員会、学校等が、全国的な状況との関係における学力に関する状況、教育条件の整備状況、児童生徒の学習環境や家庭における生活状況等を知り、その特徴や課題などを把握すること」等を目的にしている。そのため、引き続き、集団を視点にした結果等を公表していくこととする。

また、全国学力・学習状況調査の結果公表においては、実際に出題された問題例も紹介しながら、学習状況を公表している。一方、「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」は「個々の伸び」を測るために、アンカー問題（難易度が振られた過去の問題）も出題することから、出題した問題は非公開とすることが大原則となる。よって、「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」の結果公表においては、出題した問題例は紹介しないこととする。

ただし、「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」においては、新たに質問調査も見直し、非認知能力に関連する調査や学習方法等やICT利活用を児童生徒自らが振り返る質問調査を加えた。学力状況や学力の伸びとこれら非認知能力等との関連性も分析することができるようになるため、それらの分析結果も公表していくこととする。

2 調査の概要

(1) 調査の目的

学習指導要領に示す目標や内容に照らした学習の実現状況及び児童生徒の学習環境や家庭における生活状況等の特徴や課題など、児童生徒の「認知能力の伸び」と「非認知能力の変容」を継続的に把握する。その伸びや変容に影響を与える諸要因を客観的データに基づき分析・考察し、個別最適な学びと協働的な学びを実現する教員の指導力等についての有用な情報を得ることにより指導上の課題を明らかにして、授業改善を推進し、確かな学力をはぐくむ。

(2) 調査の対象

実施を希望する小学校第4学年～第6学年並びに中学校第1学年～第3学年、義務教育学校前期課程第4学年～第6学年並びに後期課程第7学年～第9学年、特別支援学校小学部第4学年～第6学年並びに中学部第1学年～第3学年

(3) 調査の実施日

- ア 小学校第4学年～第6学年、義務教育学校前期課程第4学年～第6学年
特別支援学校小学部の第4学年～第6学年
令和5年5月22日（月）から5月26日（金）までの実施指定日に、各校1学年ずつ実施
- イ 中学校第1学年～第3学年、義務教育学校後期課程第7学年～第9学年
特別支援学校中学部第1学年～第3学年
令和5年5月15日（月）から5月19日（金）までの実施指定日に、各校1学年ずつ実施

(4) 調査の内容（調査時間、出題内容、出題数、出題範囲等）

ア 教科に関する調査

(ア) 出題内容

基礎的・基本的な知識や技能を問う問題と知識・技能を活用して課題を解決するための思考力・判断力・表現力等を問う問題の約30問。解答方法は、選択式及び短答式とする。

(イ) 出題範囲

- ・小学校第4学年～第6学年、義務教育学校前期課程第4学年～第6学年
前年度までの国語科、算数科の学習内容の定着状況が把握できるもの
- ・中学校第1学年及び義務教育学校後期課程第7学年
小学校修了段階までの国語科、算数科の学習内容の定着状況が把握できるもの
- ・中学校第2学年～第3学年、義務教育学校後期課程第8学年～第9学年
前年度までの国語科、数学科、外国語科（英語）の学習内容の定着状況が把握できるもの

(ウ) 時間配当

小学校第4～第6学年は1教科40分、中学校第1～第3学年は1教科45分を標準実施時間とする。

イ 児童生徒質問調査

(ア) 出題内容

生活状況に関する項目、非認知能力に関する項目、学習方法等に関する項目、ICT利用に関する項目で構成した小・中学校共通の約100問の選択式の質問（外国語（英語）に関する項目は小学校は回答しない）。

(イ) 時間配当

小学校第4～第6学年は40分程度、中学校第1～第3学年は45分程度を目途に実施。

(5) 実施方法

1人1台端末を用いた調査（CBT：Computer Based Testing）とする。

なお、通信環境調査の結果を踏まえ、CBTでの実施が難しい場合に限り、紙による調査（PBT：Paper Based Testing）での実施も可とする。

また、本調査では、問題の難易度の推定や児童生徒の学力の推定のために、IRT（項目反応理論）という統計理論を用いることで、これまでの調査では確認することのできなかった児童生徒の個人内の学力の伸びを確認することができる。

3 結果の概要

(1) 学力の伸び

○昨年度の調査から学力が伸びた児童生徒の割合(%)【参考値】

	小学校 第5学年	小学校 第6学年	中学校 第1学年	中学校 第2学年	中学校 第3学年
国語	82.3	74.3	74.5	69.2	72.8
算数・数学	85.0	83.9	86.5	74.0	79.3
英語					86.7

※本調査は令和5年度から調査を開始しているため、上表については、実証研究校(府内30校)の伸びのデータを【参考値】として記載。

※小学校18校：5年国語956人、5年算数957人、6年国語924人、6年算数922人

※中学校12校：1年国語773人、1年数学773人、2年国語1210人、2年数学1208人、3年国語1134人、3年数学1136人、3年英語1135人

(2) 学力の状況

○令和5年度の各教科、各学年の府平均学力ステップ

国語

今までの学力の変化

	小学校4年生	小学校5年生	小学校6年生	中学校1年生	中学校2年生	中学校3年生
高						
ステップ12						
ステップ11						
ステップ10						
ステップ9						
ステップ8						
ステップ7						
ステップ6						
ステップ5						
ステップ4						
ステップ3						
ステップ2						
ステップ1						
低						

数学

今までの学力の変化

	小学校4年生	小学校5年生	小学校6年生	中学校1年生	中学校2年生	中学校3年生
高						
ステップ12						
ステップ11						
ステップ10						
ステップ9						
ステップ8						
ステップ7						
ステップ6						
ステップ5						
ステップ4						
ステップ3						
ステップ2						
ステップ1						
低						

英語

今までの学力の変化

	中学校2年生	中学校3年生
高		
ステップ12		
ステップ11		
ステップ10		
ステップ9		
ステップ8		
ステップ7		
ステップ6		
ステップ5		
ステップ4		
ステップ3		
ステップ2		
ステップ1		
低		

※各学年の学力のステップは下記の範囲内【36段階(12ステップ×3層*)】で設定

小学校 第4学年	小学校 第5学年	小学校 第6学年	中学校 第1学年	中学校 第2学年	中学校 第3学年
1-C~7-A	2-C~8-A	3-C~9-A	4-C~10-A	5-C~11-A	6-C~12-A

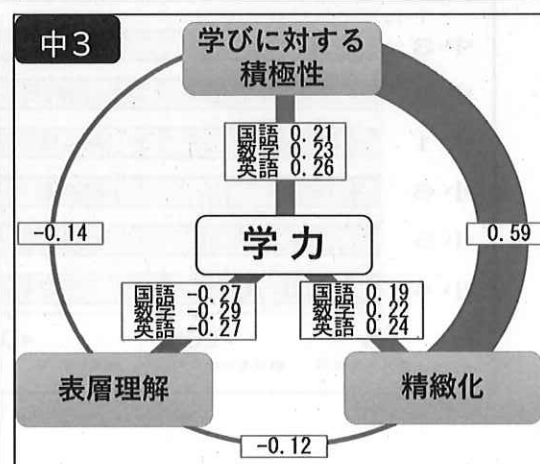
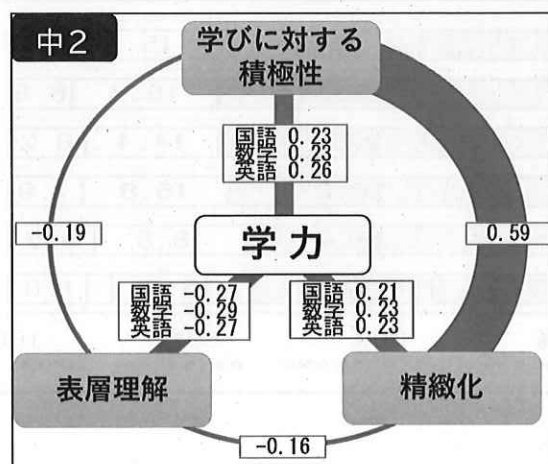
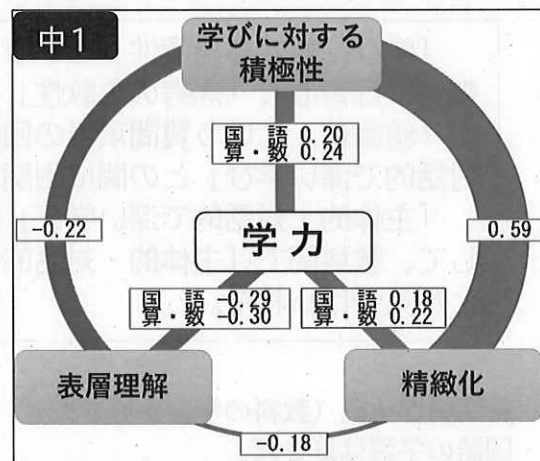
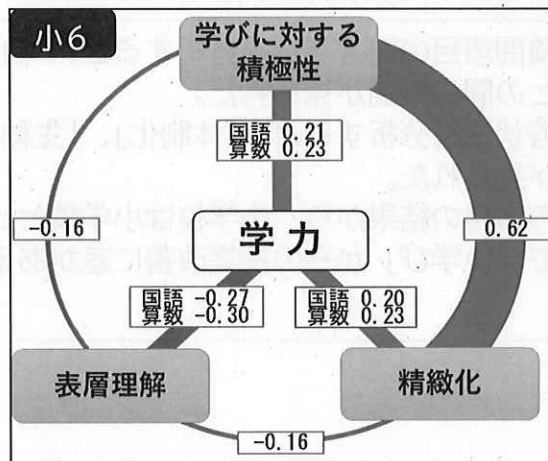
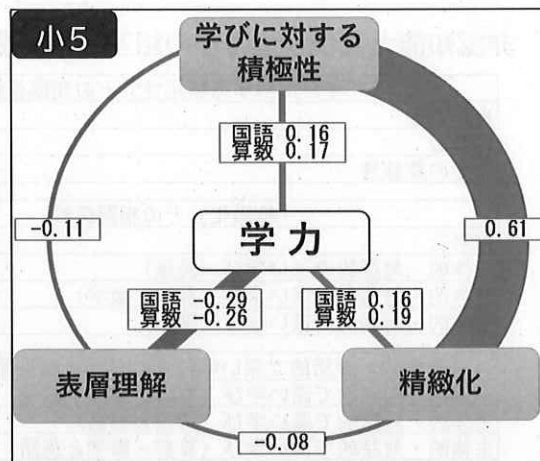
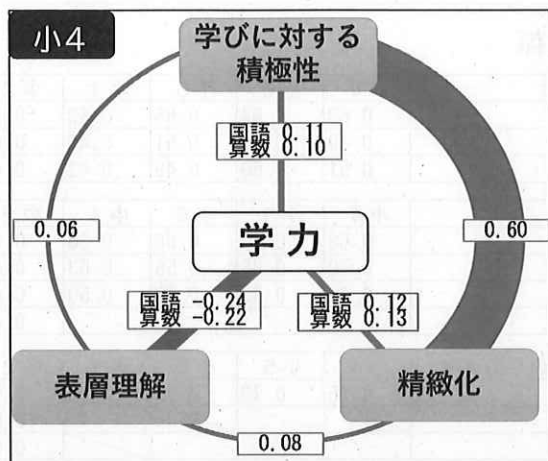
※各ステップの中で学力の高い順からA、B、C

(3) 質問調査の状況

ア 教科に関する調査結果と質問調査の結果の相関関係の例

数字は相関係数を示す
 青線は正の相関係数を示す
 赤線は負の相関係数を示す
 線の太さは相関の強さを示す
 ±0.2 以上細線
 ±0.4 以上太線

各項目の質問内容は別紙②『『京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～』における非認知能力等に関する概念質問項目対応表について』を参照



教科に関する調査結果と「学びに対する積極性」及び「精緻化」との相関関係は、小学校第6学年以上の学年において正の相関がやや高くなる傾向がみられた。また、教科に関する調査結果と「表層理解」との間には負の相関がみられ、小学校第5学年以上の学年で顕著にみられる傾向にあった。学力ステップが高い児童生徒ほど、学びを広げたり深めたりするために自ら積極的に調べたり学んだりしようとする質問や、学んだことを関連付けたり活用・発揮したりする学習経験についての質問に対して、肯定的に回答していることが分かった。

イ 非認知能力及び学習方法の相互の相関関係

「学びに対する積極性」との相関係数		小4	小5	小6	中1	中2	中3
自己調整		0.63	0.64	0.66	0.63	0.65	0.64
好奇心		0.49	0.50	0.51	0.46	0.47	0.49
思考の柔軟性		0.51	0.50	0.49	0.42	0.41	0.41

「精緻化」との相関係数		小4	小5	小6	中1	中2	中3
体制化		0.68	0.67	0.66	0.60	0.61	0.58
主体的・対話的で深い学び（国語）		0.70	0.65	0.59	0.53	0.44	0.41
主体的・対話的で深い学び（算数・数学）		0.66	0.63	0.57	0.50	0.42	0.40
主体的・対話的で深い学び（英語）						0.40	0.40

「主体的・対話的で深い学び」における教科間の相関係数		小4	小5	小6	中1	中2	中3
主体的・対話的で深い学び（国語と算数・数学）		0.76	0.76	0.74	0.63	0.57	0.54
主体的・対話的で深い学び（国語と英語）						0.58	0.58
主体的・対話的で深い学び（算数・数学と英語）						0.60	0.55

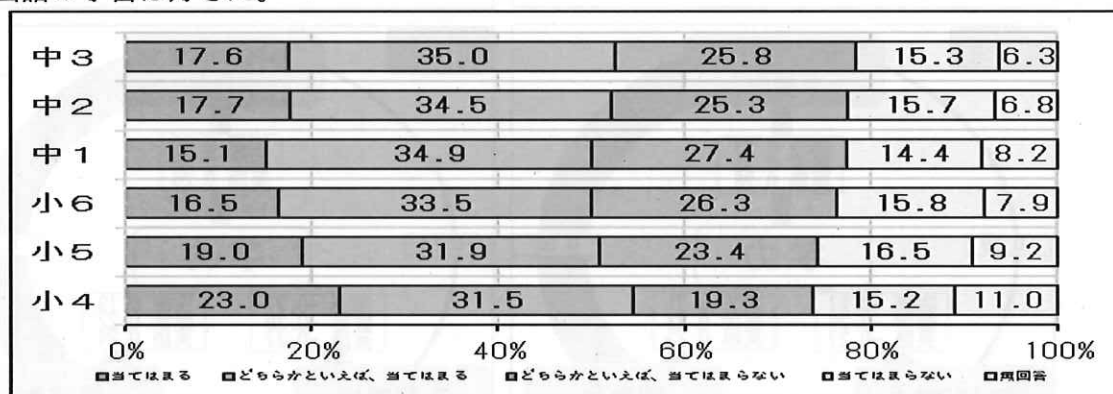
「学びに対する積極性」という質問項目の回答状況を分析すると、「自己調整」、「好奇心」、「思考の柔軟性」との間に相関が見られた。

「精緻化」という質問項目の回答状況を分析すると、「体制化」、「主体的・対話的で深い学び」との間に相関が見られた。

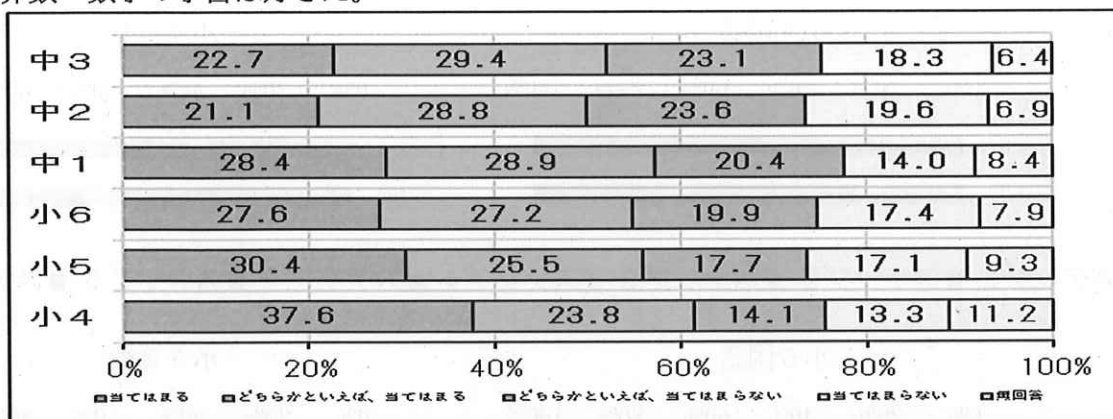
「主体的・対話的で深い学び」の項目の結果から、中学校は小学校と比較して、教科間で「主体的・対話的で深い学び」からの授業改善に差があることが見受けられた。

ウ 質問調査状況（教科の学習が好きだ）

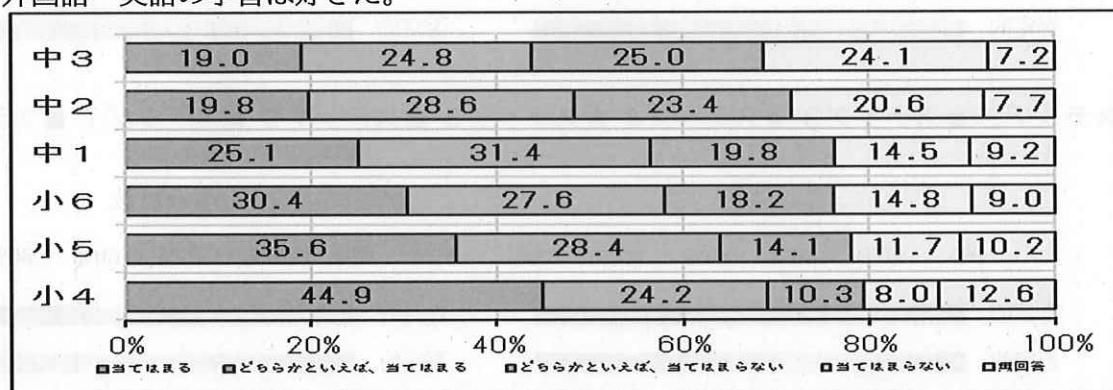
- ・国語の学習は好きだ。



・算数・数学の学習は好きだ。



・外国語・英語の学習は好きだ。



・各ステップの割合

「肯定群」(「当てはまる」+「どちらかといえば、当てはまる」)

「否定群」(「どちらかといえば、当てはまらない」+「当てはまらない」)

小4国語	ステップ1	ステップ2	ステップ3	ステップ4	ステップ5	ステップ6	ステップ7
肯定的	0.3%	0.4%	2.0%	6.9%	14.6%	13.9%	22.9%
否定的	0.4%	0.6%	2.1%	6.8%	10.5%	8.6%	9.8%

小4算数	ステップ1	ステップ2	ステップ3	ステップ4	ステップ5	ステップ6	ステップ7
肯定的	0.2%	0.4%	2.9%	7.9%	19.8%	19.9%	17.8%
否定的	0.3%	0.4%	2.9%	5.9%	11.1%	6.6%	3.4%

小5国語	ステップ2	ステップ3	ステップ4	ステップ5	ステップ6	ステップ7	ステップ8
肯定的	0.2%	0.4%	3.1%	9.1%	11.7%	11.7%	19.5%
否定的	0.2%	0.7%	4.3%	10.0%	11.6%	8.1%	9.0%

小5算数	ステップ2	ステップ3	ステップ4	ステップ5	ステップ6	ステップ7	ステップ8
肯定的	0.2%	1.3%	3.7%	12.2%	15.6%	15.7%	12.7%
否定的	0.4%	1.8%	5.3%	13.1%	9.8%	5.7%	2.0%

小6国語	ステップ3	ステップ4	ステップ5	ステップ6	ステップ7	ステップ8	ステップ9
肯定的	0.5%	1.6%	5.6%	7.3%	12.9%	8.0%	18.3%
否定的	0.6%	2.7%	8.1%	8.6%	11.6%	5.2%	8.4%

小6算数	ステップ3	ステップ4	ステップ5	ステップ6	ステップ7	ステップ8	ステップ9
肯定的	0.5%	2.3%	6.9%	11.1%	15.0%	10.8%	12.5%
否定的	1.3%	4.3%	10.0%	10.3%	9.0%	3.5%	2.0%

中1国語	ステップ4	ステップ5	ステップ6	ステップ7	ステップ8	ステップ9	ステップ10
肯定的	0.9%	1.9%	5.6%	12.6%	14.4%	10.6%	8.4%
否定的	1.3%	2.5%	7.2%	12.6%	11.4%	6.1%	4.3%

中1算数・数学	ステップ4	ステップ5	ステップ6	ステップ7	ステップ8	ステップ9	ステップ10
肯定的	1.0%	4.5%	6.2%	14.8%	14.4%	12.6%	8.9%
否定的	1.6%	6.0%	7.1%	10.4%	6.9%	3.8%	1.3%

中2国語	ステップ5	ステップ6	ステップ7	ステップ8	ステップ9	ステップ10	ステップ11
肯定的	1.0%	3.6%	9.8%	15.0%	12.9%	7.9%	6.1%
否定的	1.8%	4.8%	10.4%	12.2%	8.2%	4.0%	2.8%

中2数学	ステップ5	ステップ6	ステップ7	ステップ8	ステップ9	ステップ10	ステップ11
肯定的	2.0%	5.5%	8.2%	10.4%	11.0%	9.9%	7.0%
否定的	4.4%	10.6%	11.1%	9.5%	6.2%	3.3%	1.4%

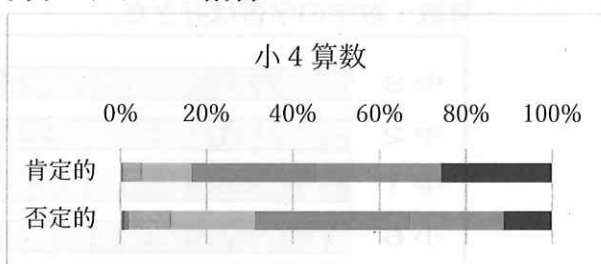
中2英語	ステップ5	ステップ6	ステップ7	ステップ8	ステップ9	ステップ10	ステップ11
肯定的	0.4%	1.7%	4.7%	7.8%	8.6%	9.4%	19.7%
否定的	1.0%	3.8%	10.6%	11.8%	7.6%	6.3%	6.3%

中3国語	ステップ6	ステップ7	ステップ8	ステップ9	ステップ10	ステップ11	ステップ12
肯定的	2.8%	6.8%	15.6%	13.1%	12.2%	5.1%	2.4%
否定的	3.4%	7.4%	15.3%	9.3%	6.4%	2.3%	0.9%

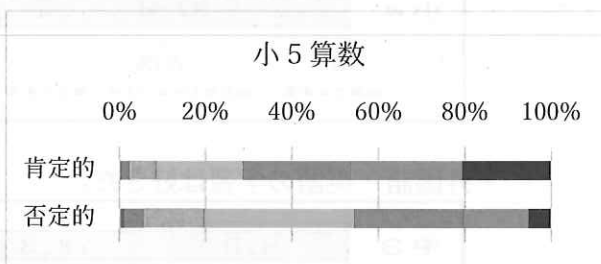
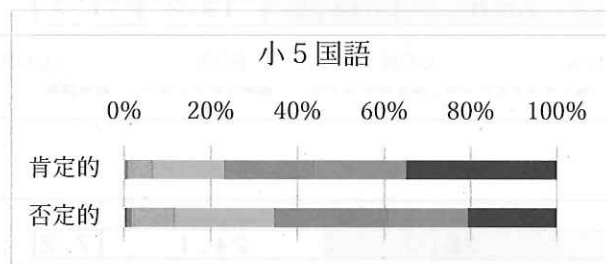
中3数学	ステップ6	ステップ7	ステップ8	ステップ9	ステップ10	ステップ11	ステップ12
肯定的	4.9%	6.1%	12.8%	14.2%	7.5%	7.4%	4.4%
否定的	9.8%	9.5%	12.3%	8.3%	3.2%	2.0%	0.6%

中3英語	ステップ6	ステップ7	ステップ8	ステップ9	ステップ10	ステップ11	ステップ12
肯定的	0.3%	2.3%	4.6%	6.0%	7.7%	9.9%	17.4%
否定的	1.4%	7.9%	12.2%	10.9%	9.2%	7.3%	5.0%

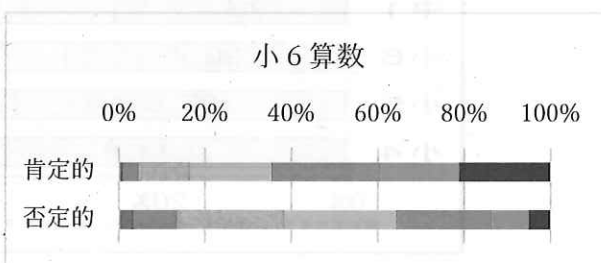
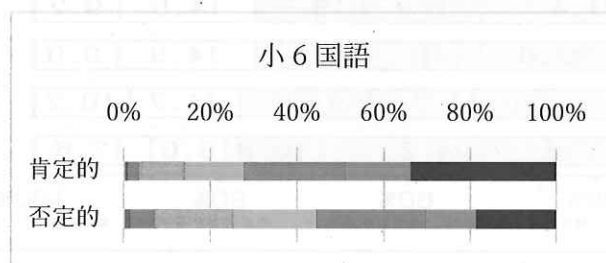
・肯定的回答、否定的回答それぞれにおける各学力ステップの割合



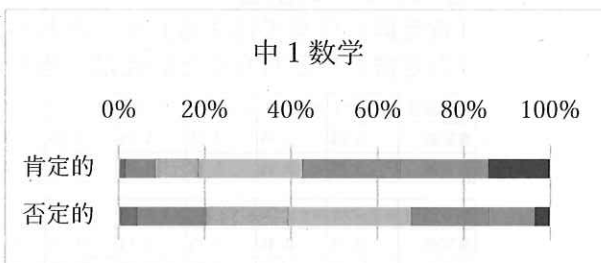
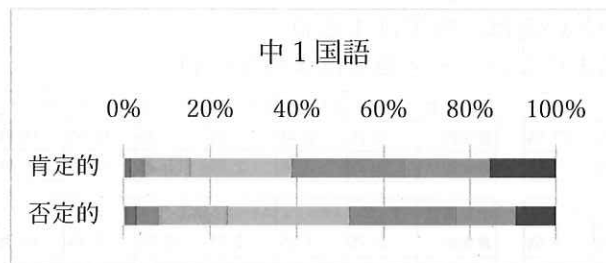
■ ステップ1 ■ ステップ2 ■ ステップ3 ■ ステップ4 ■ ステップ5 ■ ステップ6 ■ ステップ7



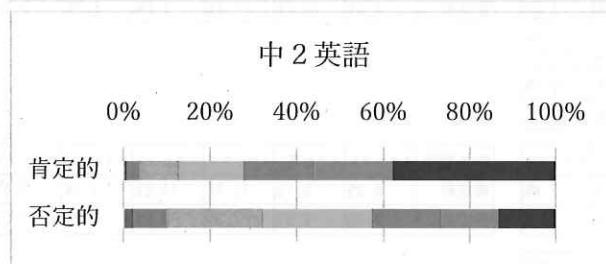
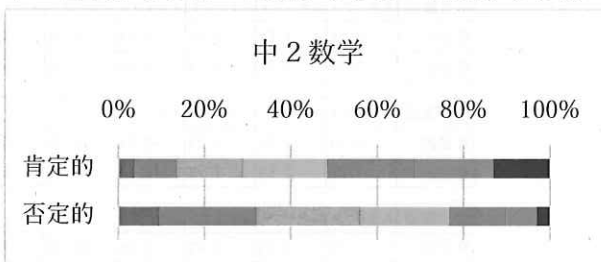
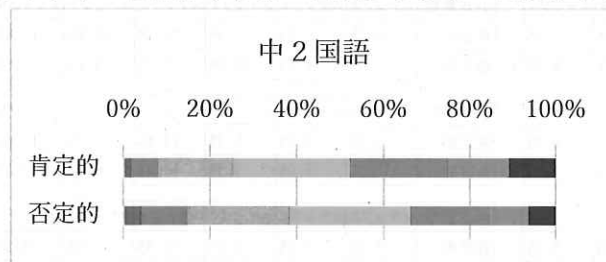
■ ステップ2 ■ ステップ3 ■ ステップ4 ■ ステップ5 ■ ステップ6 ■ ステップ7 ■ ステップ8



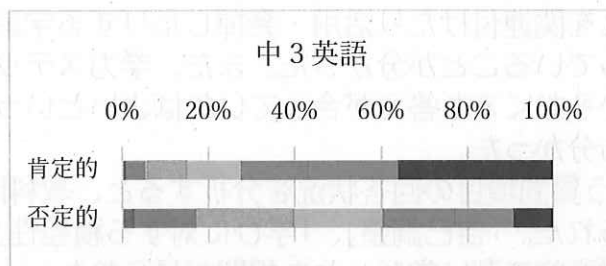
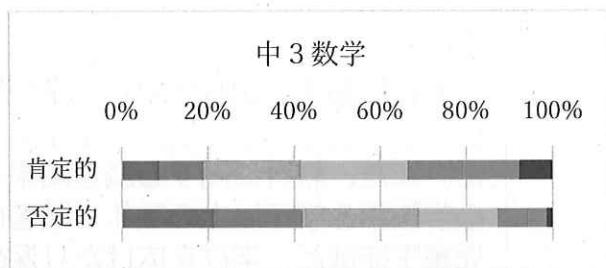
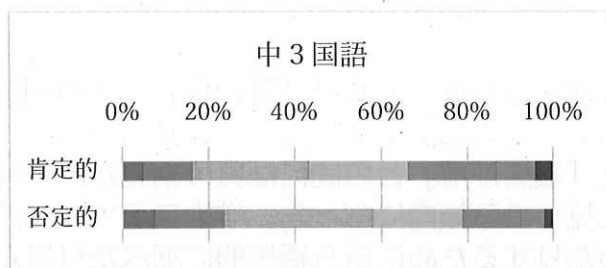
■ ステップ3 ■ ステップ4 ■ ステップ5 ■ ステップ6 ■ ステップ7 ■ ステップ8 ■ ステップ9



■ ステップ4 ■ ステップ5 ■ ステップ6 ■ ステップ7 ■ ステップ8 ■ ステップ9 ■ ステップ10



■ ステップ5 ■ ステップ6 ■ ステップ7 ■ ステップ8 ■ ステップ9 ■ ステップ10 ■ ステップ11



■ ステップ6 ■ ステップ7 ■ ステップ8 ■ ステップ9 ■ ステップ10 ■ ステップ11 ■ ステップ12

「教科の学習が好き」という質問項目の回答状況を学年毎に見ると、算数・数学及び英語において、学年が上がるにつれて肯定的な回答が減少した。とりわけ、英語においては顕著であった。

「教科の学習が好き」という質問に対して、「当てはまる」と「どちらかといえば、当てはまる」と回答する「肯定群」と「どちらかといえば、当てはまる」と「当てはまらない」と回答する「否定群」とに分けて見ていくと、すべての教科において、ステップが高い児童生徒ほど肯定的に回答している割合が多かった。

4 結果からの考察

教科に関する調査結果と「学びに対する積極性」及び「精緻化」との相関関係は、小学校第6学年以上の学年において正の相関がやや高くなる傾向が見られた。また、教科に関する調査結果と「表層理解」との間には負の相関がみられ、小学校第5学年以上の学年で顕著に見られる傾向にあった。学力ステップが高い児童生徒ほど、学びを広げたり深めたりするために自ら積極的に調べたり学んだりしようとする質問や、学んだことを関連付けたり活用・発揮したりする学習経験についての質問に肯定的に回答していることが分かった。また、学力ステップが低い児童生徒ほど、解き方が分からなくても答えが合っていればよいといった項目に肯定的に回答していることも分かった。

一方、「教科の学習が好き」という質問項目の回答状況を分析すると、教科間で差はあるが、学力との相関が見られた。「自己調整」、「学びに対する積極性」、「体制化」、「精緻化」、「主体的・対話的で深い学び」とも相関が見られた。

以上の結果から、教科の学習が好きであることと、主体的な学びにつながりがあると考えられる。各学校には、児童生徒の「もっと知りたい、探究しよう」とする知的好奇心を活かした授業展開や学習活動の工夫が求められる。そのためには、小学校の低・中学年から、ICT端末の利活用を含め、調べたいことや分からないことがある時に自ら行動できるような学習環境や学習機会の確保が求められる。

授業の中で、児童生徒が自分の考えを表現することや他者との対話に価値を見出し、目的意識をもって学習活動に取り組むことが大切である。

既習事項や他教科の学びを活かす等の学習経験を積むことで、教科の魅力や学ぶ意義を、児童生徒が実感することができると考える。

「主体的・対話的で深い学び」の項目の結果から、中学校は小学校と比較して、教科間で「主体的・対話的で深い学び」からの授業改善に差があることが見受けられた。教科の壁を越えて、学校全体で授業改善に取り組むことで、教科の魅力や学ぶ意義を児童生徒が実感することができると考える。

5 結果の活用

8月1日に調査結果を各校に返却するとともに、府教委主催で府内全小・中学校を対象とする研修（活用研修会）を8月及び9月の2回実施した。府内全校での分析や校内研修の実施、学校改善プランの策定等を促している。これらの取組により、3学期～次年度の指導・学校運営の改善につなげる。

また、個々の児童生徒の結果については、2学期始業後、各学校において返却。調査結果を振り返る取組が進められている。

今後、府教委において調査結果のさらなる分析を進め、年末までに各学校における授業改善の参考となる「学校改善支援プラン」を策定予定である。府教委においても、これらの結果を施策や指導助言の改善に活用していく。